

開発、死、他者

サイ・ノー・カン監督

『The Forgotten Voices of The Mekong』をめぐって

山本文子

The Forgotten Voices of The Mekong あらすじ

メコン川沿いのある少数民族の村で若いチャーリーが村長に選ばれた。彼は村人たちに村の発展を説き、ヤンゴンの金採掘業者による開発を提案する。この開発により村の賃金労働が保証され、幹線道路の建設も約束されると言って村人を説得する。賛成する村人もいる一方で、村の老女は、こうした開発は自然と共生してきた自分たちの伝統的な生活に合わないとして断固拒否する。老女の反対にもかかわらず開発が始まるが、その結果生活用水であるメコン川の汚染水被害が続出する。水を飲んだ幼い少女がその犠牲となり、さらに開発に反対していた老女も亡くなる。2人の女性の死をとおして村長チャーリーは開発こそが幸福につながると自分を偽って言い聞かせていたことを反省する。

1. はじめに

メコン川はミャンマー東部シャン州の最東を流れ、隣国ラオスとの国境となっている。メコン川はこの周辺に暮らす少数民族の生活において貴重な水源である。本作はメコン川の水を巡るミャンマー側の少数民族の人たちのあいだでの葛藤を描いている。タイトル「メコン川の忘れられた声」における「メコン川」はその水によって生かされている少数民族の人々、とりわけ犠牲となった少女と伝統文化の保持を訴える老女の換喩であり、彼女たちの声を無視した強引な開発に対する批判が込められている。このオムニバス映画の他の4作品に比べ、依頼者側の伝えたいメッセージである自然環境保護¹⁾がストレートに表現されている作品である。

本作で扱われている金採掘はミャンマーで実際に行われている開発の1つである。ミャンマーは金を含め鉱山資源が豊富で、政府の方針で積極的に開発

が進められている。2018年7月に新ミャンマー鉱業法が施行されて以降、ミャンマー国内資本および外資が参入を模索しており²⁾、金採掘に関しては、2018年時点で国内には大規模な金採掘鉱区が5か所、小規模採掘鉱区が263か所ある³⁾。しかしこうした開発に伴って水質汚染や水銀被害が報告されており⁴⁾、鉱山開発を巡る開発側と現地住民の衝突も過去には見られた⁵⁾。本作はこうした現状を踏まえて、ラオス国

2) 「海外投資企業8社がミャンマーの採掘許可を申請」(TNY国際法律事務所(ミャンマー)、2019年6月5日)(<https://tny-myanmar.com/news/3945/>)(2022年1月3日閲覧)。

3) 「ミャンマー資源・環境保護省、個人に金採掘の事業権を付与」(ミャンマー・ジャポン 2018年12月6日)(<https://myanmarjapon.com/newsdigest/2018/12/06-14524.php>)(2021年5月2日閲覧)。

4) 以下のブログを参照した。「ミャンマーで金採掘」(Auto Craft 本店 2019年5月28日)(<http://auto-craft.biz/posts/post8.html>)(2022年1月3日閲覧)。

5) たとえば鉱山開発を巡る問題としては、過去にザガイン管区モンユワ郡のレツパダウン銅山において、地元住民と開発企業とのあいだで衝突が見られる。この問題を取り上げた記事によれば、住民は環境への影響を懸念し、強制的な土地収用に対して不満を持っていた。「ヒューマンライツウォッチ ビルマ: 鉱山開発反対運動に対する激しい弾圧 検証を」(2012年12月1日)(<https://www.hrw.org/ja/news/2012/12/01/248172>)(2022年1月3日閲覧)。

1) 本作を通じて依頼者側の伝えたいメッセージについては以下の通りである。「舞台を2030年に設定されたこの映画の制作目的は、映画を観た観客が深刻なダメージを受けている環境に目を向け、自然環境を保護する活動に積極的に参加するよう観客の動機づけを行うことにある」[橋本 2021: 8]。

境であるメコン川周辺で暮らす少数民族の金採掘開発をめぐる葛藤を描いている。

サイ・ノー・カン監督はシャン州出身で、2014年以降ヤンゴン映画学校(YFS)にてドキュメンタリーを中心に映画製作を学んだ若手監督である。これまでドキュメンタリー作品を2本製作しており、『The Crocodile Creek』(監督、2015年)⁶⁾はヤンゴン川にまつわるワニの伝説⁷⁾と河川の汚染問題を、『32 Souls』(監督、2016年)はシャン州北部に住む1人の老女についての「記憶」を扱っている⁸⁾。今回は劇映画だが、出演者は監督がロケ地として選んだアカ族の一般の村人が中心で、彼らの生活や文化を尊重しながら製作された。とりわけアカの老女との出会いは本作の核である「開発を進めたい若い村長と伝統的な生活を守りたい老女との対立」というテーマ設定につながっている。

本稿では、物語の核である開発をめぐる世代間の衝突、そして少女と老女という2人の死者、最後に開発業者をはじめとする「他者」という3つのトピックを取り上げて、ミャンマーの文脈に即して読み解いていく。

2. 開発と伝統

本作でもっとも印象に残るのは独特の存在感を放つ老女であろう。彼女を通じて伝統的価値観が体現され、それは開発を誘致したい若い村長(近代的価値観の代表)と好対照である。この節では監督が2人の対立を通して何を伝えようとしているのか、また冒頭とラストにのみ登場する、老女と会話する少年が一体何を表しているのかを考察する。

2-1. 伝統的価値観と近代的価値観

作品中では少数民族の具体名は出てこないが、先述したように本作はメコン川沿いに暮らすアカ族の村が舞台となっている。伝統的な生活とそれを脅か

す開発がテーマとなっているので、まずはアカ族の生活について簡単にみておきたい⁹⁾。

アカ族は中国南部に起源を持ち、現在はタイ、ラオス、ミャンマー、中国雲南省にまたがって暮らす山岳少数民族である。元来は口承が中心の無文字文化で、農業を中心に、その他牧畜と採集を行って暮らしている。宗教的には、伝統的な精霊信仰のほかキリスト教やイスラム教も伝わっている。キリスト教については1930年代にカレン族宣教師によりプロテスタントが伝わったとされる[勘田 2016:127]。本作では村人の集会が教会のような場所で行われており、死者を弔う場面でも牧師らしき人物が登場し、村人たちによって讃美歌が歌われていた。本作の舞台は、外来の宗教であるキリスト教がある程度浸透している地域であることが読み取れる。

本作では老女を通じて、川と山に囲まれ自然とともに生きてきた村の人びとの生活とその価値観が表現される。たとえば老女がはじめて登場するシーンでは、彼女が自然に関する豊富な知識を持っていることが示される。土いじりをする老女に、少年が薬草の生育場所やその効能について質問する。老女は薬草についての知識を伝えるとともに「これら(薬草)が私たちが私たちにしている。だから守らないといけない」と答える。この言葉からは、自分たちの生活が自然とともに成り立つこと、また自分自身が自然であるという自分と自然の境目がなくなるようなアニミズム的な自然観が透けて見える。自然とともに生きてきた老女にとって金採掘開発は自然環境と彼らの伝統的な暮らしを破壊するものであり、彼女は開発誘致に対して断固反対する。

一方村長のチャーリーは30代と思しき若い男性である。本作に登場する人物のうち唯一具体的な名前が出てくる人物である。チャーリーという名は明らかに西洋風の名前で、洗礼名であることを想像させる。名前のほかにも彼はほとんどの場面でシャツにスラックスという服装で、ほかの村人の多くが伝統衣装を身にまとっているのとは対照的である。腕に光る金色の腕時計は近代の象徴であり、時間を管理する生活を送っていることを窺わせる。彼の名前や服装が示唆するように、彼はアカ族であると同時に、外部との接点を持ち、近代的な価値観を享受してい

9) アカ族についての記述は勘田[2016]を参考にした。

6) https://www.imdb.com/title/tt5237624/?ref_=nm_knf_t1参照(2022年1月3日閲覧)。

7) 古くから伝わる伝説で、ヤンゴン川を挟んだ2つの王国の王子と王女の悲恋の物語である。

8) 『32 Souls』(2016)は未見だが、シャン州北部に住む1人の遠縁の親戚である老女のドキュメンタリーで、貧困と喪失に満ちた自分の人生を振り返るという内容である。<http://yangonfilmschool.org/32-souls/>を参照(2022年1月3日閲覧)。

ることがわかる。彼はヤンゴンまで出向き開発業者とやり取りをし、村の発展のために苦心する。彼がなぜ開発に固執するかは物語の後半で明らかになるが（農民だった親を貧困のために失い孤児として辛い人生を送ってきた）、村長に選ばれた彼は発展こそが村人の幸せにつながると自分に言い聞かせる。

2-2. 世代間の衝突

開発の恩恵について村人に熱心に語るのが開発業者の人々ではなく村長である点が本作の特徴の1つである。このことは村人の側も「反開発」の一枚岩でなく、近代的な生活にあこがれ、開発を歓迎する人がいることを示している。このテーマは監督が老女との出会いを通じて着想したものである。

「脚本を書き終えてから、この老女をキャストイングした。彼女だけが日常的に伝統衣装を着ていた。ほかの若者はもっとカジュアルな恰好だった。そこで自然を大事にする年配の人たちと村の近代化を進めたい若者たちの衝突というアイデアを思いついた。どちらが正しい、間違っているということとは言えないような衝突。メコン川を巡っては、自然保全もしたいし、同時に快適な生活もほしいという衝突が現実存在する。実際にこの村には電気がなく、しかし電気を引こうとはしていた。撮影中はこの村に滞在していたが、幸せだった。携帯電話やインターネットを使う毎日から、村での2週間は携帯電話や電気をすることもなくなって、とても穏やかに感じた。しかし彼らも変化している。だから私はこういったことは自分の映画に含めるべきだと思った。だから自然を大事にする老女と近代的な生活を求める若い世代との衝突を描きたいと思った」¹⁰⁾（下線部は筆者）。

監督が述べるように、「彼らも変化している」のが現実である。若者たちは開発側の論理を知らぬ間に受け入れ、その価値観を共有し、次第に開発側の代弁者となって開発に反対する人たちを説得するようになる。つまり「少数民族＝被搾取／開発側＝搾取」という単純な二項対立では捉えきれないことがわかる。

10) A Dialogue on Painting with Light In Conversation with the directors of Mekong 2030 参照。

ただし本作では、近代の価値観を疑いなく受容しているように見える村長に、終盤で実際には葛藤に苦しんでいることを吐露させている。村長のこうした葛藤は映画の最後ではっきりと言語化される。臨終のときを迎えようとしている老女に対して村長が自らの生い立ちに言及し葛藤を吐露するシーンである。

「知っているだろ、これ（開発誘致）は俺の長年の夢だった。俺たちの生活を良くも悪くも変化させるもんだってわかってた。（……）でも俺の両親は農民で、苦しんできたのも知っているだろ？ 2人は貧しさのせいで死んだんだ。俺みたいな孤児がどうやって生き抜いていったらいいか誰か教えてくれよ。今は会社で働いているけれど、彼らが俺たちの生活をひどいものにするだろうことはわかってた。また俺みたいな運命の奴を増やすのか？ あんた（老女）が正しかったんだ！ あんたの勝ちだ！ 俺の負けだ」（映画より）。

村長のこの感情の吐露によって、開発側の論理の敗北が明示される。村長自身も開発側の論理の危うさを知っていながら、発展こそが正義であると主張し続ける自己欺瞞に苛まれていたことが明らかになる。つまり最終的にはこの映画は開発による自然環境と少数民族の文化の破壊を糾弾し、その保護を訴えて終わる。

2-3. 謎の少年

老女と村長の対立と関連して、冒頭で老女に家畜や薬草について尋ねる少年について触れておきたい¹¹⁾。少年は黄色のキャップに青いシャツ、赤い半ズボンという服装で、ロープにぶら下がって揺れて遊びながら、老女に家畜や薬草の知識についてあれこれ質問する。老女は少年に長年の生活で培ってきた自然の知識を伝授する。しかし、この少年が誰の子供なのか、老女とどのような関係にあるかは一切示されない。

この少年はラストで再び登場する。老女が死に、その後上空から冒頭同様に山々を映す場面である。ここでは老女と少年の音声のみの会話である。少年は老女になぜ木が減ってきたのか、なぜそれを止める

11) この少年の奇妙さについては研究会において山本博之氏からご指摘をいただいた。

ことができないのかを尋ねる。老女の答えは「それは悪魔が食べてしまったから」で、「彼ら(悪魔)はいつまでたっても空腹で、なくなるまで食べつくす」というものである。

この少年は単に村の子供と見ることもできるが、登場人物らとの関係性が不明で、冒頭とラストのみ登場する不気味な存在である。少年と老女という世代の離れた2人によるやり取りは、表面的に見れば村の知識が世代を超えて受け継がれる様子を表していると考えられるが、なぜ少女ではなく少年なのか、なぜ冒頭とラストにだけ登場するのだろうか。

考えられるのは、この少年は実在せず、冒頭とラストの少年と老女のやり取りは実際の会話ではなく、空想上の会話であるという可能性である。少女ではなく少年であるのは、この少年が村長のもう1つの姿だからとは考えられないだろうか。もう1つの姿とは、開発側の論理の代理人としての姿ではなく、自然に囲まれた伝統的な村の生活を愛する姿である。先述したように、村長は老女の価値観が正しいことを理解しながら、開発を誘致する自分に葛藤していた。冒頭とラストで老女に様々な自然にまつわる知識を教わる少年は、村長の本来の姿を表していると考えることができる。

3. 2人の死者

本作では、村長の葛藤の吐露(開発側の論理の敗北)に至るまでに、2人が開発の犠牲者となっている。まず村の少女が死に、その後開発に断固反対していた老女も死ぬ。開発の犠牲者はなぜ少女と老女でなくてはならなかったのだろうか。この節では、2人の死者から何が読み取れるのかを考察する。

3-1. 社会の権力構造

1人目の死者は少女である。家畜の放牧中に川の水を飲んで具合が悪くなり、そのまま亡くなってしまふ。彼女が水を飲む以前に、川の水を飲んだ家畜が死ぬ事例が村長に報告されていたが、その後も開発が続行されていた。つまり少女の死は本来防げたはずの死である。

その後老女が死ぬ。老女の死因ははっきりしないが、彼女は村の集会で開発誘致に断固反対してから

食事を摂らなくなり、そのことによる衰弱死と思われる。というのは、劇中では村長が老女の孫娘の元を訪れて、老女の様子を尋ねる場面で、孫娘は「お婆さんは食べるのを拒否しているわ。頑固なのは知っているでしょう」と返しているからである。「頑固」という言葉は開発事業への反対を意味していると考えられる。この台詞からは老女が開発事業への抗議の意味を込めて、ハンガーストライキを行っていると思われる(ただしその後ハンガーストライキを断念したのか、孫娘からご飯を食べさせてもらっているシーンがある)。ハンガーストライキを行っていたのだとすると、老女も開発による犠牲者ということになる。

少女と老女という死者は、社会的弱者の象徴と考えられる。子供は金採掘や開発などの事情を知らず、大人に比べて情報へのアクセスを持たない。そのため被害者になりやすい。老女は村の集会で発言権を有していたものの、若い世代からはやや冷ややかな反応を受けていた。伝統を大事にする長老というよりは変化を受け付けない頑固者として描かれ、結局老女の声に耳が傾けられることなく、開発が始まった。

亡くなるのが2人とも女性であるのも、女性の社会的な弱さの表れであろう。たとえば村の集会では村長のチャーリーはじめ村人の前に座っていたのはすべて男性だった。こうした描写はこの村での男性の優位性を暗示している。村の最高権力者の村長が「若い男性」であることは開発の犠牲者が少女と老女である点と好対照である¹²⁾。

3-2. 老女の死と魂

2人の死に関しては、少女のみ死後に葬儀のシーンがあり、老女については葬儀シーンが明確には描かれていない点が奇妙である。老女は劇中で、魂が川と共に生きられるように川の傍での土葬を希望していた。しかしその場面は描かれない。このことは何を意味しているのだろうか。まずは2人の死後の描写を確認する。

少女についてはキリスト教に則って土葬が行われたと考えられる。アカにはプロテスタントが伝わっ

12) アカ社会の男性優位について、勘田によれば、タイ側に暮らすアカ族について、(タイ族を含まず)アカ族だけで構成される村ではアカ族の男性が村長に選ばれるという[勘田 2016: 53]。

ているとされるので、挨拶を述べているのは牧師であろう。土葬の場所が川のそばかはわからないが、近くに墓が2つあったので共同墓地として使われている場所だと考えられる。地面が掘られ、アカの民族衣装をまとった村人たちが歌詞を見ながらアカ語で讚美歌を歌っている。この村にはキリスト教がある程度浸透しており、キリスト教のやり方で死者を弔うのが一般的であると思わせる描写である。

一方老女については少女のときのような葬儀シーンはない。映画の終盤に老女が死に、その後上空から川沿いの集落や山々を見下ろした風景になり、そこにアカの伝統歌のようなものが流れ、その後音声のみで少年と老女の会話が続く。

このラストの場面は冒頭を想起させる。冒頭では上空から山々が映し出され、そこに少女の葬儀のときと同じような牧師の言葉が重なり、続いてアカ語で讚美歌が歌われる。しかし牧師の挨拶が少女の葬儀では「旅立つ娘 (For the departed daughter)」、映画の冒頭では「旅立つ者 (For the departed one)」と区別されていることから、映画冒頭の牧師の言葉は少女ではなくもう1人の死者である老女に向けてのものであると解釈できる。そうすると、終盤の老女の死は実は映画冒頭で弔われていることになり、映画そのものが循環構造となっている¹³⁾。それは老女の魂の循環をも示唆しているかもしれない。

老女の魂については、彼女自身が理想の魂の在り方を語っている点も見逃せない。老女が「(川のそばに土葬されれば) 魂は永遠に川と共に生きられる」と述べるシーンがあり、ここには先述したような自然と一体化するようなアニミズム的自然観が見られる。この魂のイメージは、牧師が語る魂とは異なる。牧師によれば「旅立つ者は天国に帰っていく。彼女の魂が天の父のもとに戻り、彼女の身体は土として残る」のであり、つまり魂は「天の父のもと」に戻る。しかし「天 (heaven)」はあくまでもキリスト教的な世界観であろう。死者の魂をめぐる異なる2つの語りはこの土地における2つの信仰体系の混合あるいは競合を示唆している。

13) この点にかんしては研究会の場で橋本彩氏から示唆を受けた。

4. 「他者」の意味

本作は少数民族が金採掘業者という最大の「他者」に死をもって抵抗する物語だが、彼らにとっての「他者」は開発業者だけではない。物語のなかで監督は老女に「ビルマ兵」について語らせ、また具合の悪い少女を診察する医者としてアカ語のできない「町医者」を登場させる。この節ではこれら「他者」の描写から何が読み取れるかを考察する。

4-1. ビルマ兵

老女が「ビルマ兵」について言及する場面がある。老女が孫娘と川沿いを歩きながら、夫の死を語るシーンである。このシーンに先立ち、村での話し合いの場面があり、そこでは村長が開発誘致に向けて村人を説得する。村人たちは賛否を決めかねていたが、老女は決然と、伝統的な生活や自然が破壊されると村長に異を唱えて、話し合いから立ち去る。その後、老女は若い頃に夫と撮った写真を電気もない家の中でじっと見つめる。その後、川沿いを散歩しながら老女は孫娘に次のように語る。

「お前のおじいさんはビルマ兵にポーター(担夫)として連れて行かれ、病気になって戻ってきた。夫とは、どちらが先に死んでも、残ったほうは遺体を川沿いに埋めよう、と約束した。そうすれば魂は永遠に川と共に生きられる」(映画より)。

「ビルマ兵にポーターとして連れて行かれて、病気になった。」という部分は、村での話し合いで村人の一人から提出された「金採掘業者から安易な労働力として搾取され、その後はどうなるのか?」という懸念と重なる。つまりここでビルマ兵は金採掘業者と重ね合わされている。そしてアカの人たちは、その両方から一方的に都合のよいように搾取される存在であると、この老女が考えていることが読みとれる。

ビルマという国が長い間少数民族を弾圧してきたことはよく知られている。ポーターとして少数民族を徴兵するということが十分にあっただろう。軍人のなり手が少ない現在、軍による若者の拉致が普通に行われているとも聞く。つまり、老女にとって金採掘業者は、ビルマ兵を、そして使い捨てにされる少数

民族の人たちの末路を想起させるものである。

一方、金採掘業者とビルマ軍とでは違いもある。ビルマ兵に搾取された夫は病気になったが、村に戻ることが許され、最後は川（自分たちを生かしてくれている自然の恵み）の近くに眠ることができた。しかし、今回はその川自体が奪われそうになっているという点である。老女は、魂は川沿いに埋められることで永遠に川と共に生きられると述べており、彼らにとって川を奪われることは魂の危機を意味している。

4-2. 町医者

もうひとつの「他者」は少女が体調を崩したさいに、町から診察にやってきたと思われる女性の医者である。彼女はアカ語ではなくビルマ語を話していた。彼女がビルマ人かどうかはわからないが、少なくともアカ語ができない人物であることがわかる。また少女の父親は医者とビルマ語で会話をしていた。つまり彼は母語のアカ語だけでなくビルマ語がある程度できる村人として描かれている。

ミャンマーでは軍事政権時代にビルマ族への同化政策が始まり、少数民族に対してもビルマ語教育が徹底されたという経緯がある。ゆえに少女の父親がビルマ語の会話ができることは不思議ではない¹⁴⁾。

アカ語ができない町医者の登場は、村に医師がない、あるいは医師がいたとしても重病に対応できるほどの医師ではないことを示している¹⁵⁾。つまり町と村の格差を暗示している。アカの人たちは病気になったさいに町の人に依存せざるを得ず、彼らと意思疎通しようと思えばビルマ語もある程度できる必要があるということでもある。

老女は村での集会で開発誘致に反対するさい「これ以上よそ者にこの村に入ってきてほしくない」と

14) 言葉の問題は映画製作においても問題だった。監督によれば製作側はアカ語ができず、アカの人たちと意思疎通をするためにはビルマ語しか使えない状況だった。そこでビルマ語ができるアカの若者が、アカの人々と製作サイドとのあいだで通訳をしてくれて大いに助かったという (MEKONG 2030: Directors in Dialogue 参照)。

15) 医師になるためには医学の学位が必要である。この村の教育レベルを示す描写としては、冒頭の村長の演説が行われた施設に学位授与の記念写真が飾られていた場面が挙げられる。また村長は孫娘の能力を高く評価しており、開発誘致への協力を促していた。しかし一般的に考えると、少数民族の人たちがミャンマーの教育制度の中で高学歴を収め、成功することは容易ではないだろう。

言っていたが、この町医者の場面は、アカの人々の生活は現実には様々なレベルでの外部との交流の上にはじめて成立していることを示している。

5. 最後に

本作は開発による環境汚染を真正面から描き、このオムニバス映画の中でもっともストレートに自然環境や少数民族の文化の保護を訴えている。先述した、ラストでの老女と少年のやり取りが印象的である。少年から木の減少の原因とそれを止められない理由を尋ねられた老女は「それは悪魔 (devil) が食べたからだ。彼らはいつまでたっても空腹だ。なくなるまで食べつくす。でも私たちにもできることがある。私たちはまた森を取り戻せる」と答える。この言葉は監督の私たちへのメッセージであろう。そして「私たちにもできること」が何かを考えること、これが私たちに残された宿題である。

参考文献・参考ウェブサイト

- A Dialogue on *Painting with Light* In Conversation with the directors of *Mekong 2030*. <<https://www.nationalgallery.sg/blog/painting-with-light-dialogue-directors-mekong-2030>>
- MEKONG 2030: Directors in Dialogue. <<https://vimeo.com/491541505>>
- 勘田義治 2016 「タイ・ビルマ国境山岳地帯におけるキリスト教受容の一事例——チェンラーイのアカ族におけるキリスト教共同体形成過程とその変化」(関東学院大学、博士論文)。
- JOGMEC 2018 「世界の鉱業の趨勢2018 ミャンマー」<http://mric.jogmec.go.jp/wp-content/uploads/2018/12/trend2018_mm.pdf> (2022年1月3日閲覧)。
- 橋本彩 2021 「特集 母なる川との対話——『メコン2030』にみる災厄と相克 特集にあたって」CIRAS Discussion Paper No.100 『越境する災い——混成アジア映画研究2020』、p. 8。